

## 画塾

画塾の先生 成田陽介

生徒男 篠田  
生徒男 田代  
生徒女 浜野  
生徒女 金沢  
生徒女 瀬戸  
生徒女 宮崎

成田陽介の妻 成田典子

### ●画塾

静物デッサンのモチーフを囲んでデッサンをする生徒が6人（女子4名男子2名）

先生がデッサンを見て回っている。

たまに生徒のデッサンに何かしら指導をする。個人的に言われた生徒は「はい」「ありがとうございます」などの反応。

先生 「ブロックの形の狂いはぱっと見でわかるから。ちゃんと比較して合わせていこうな。  
（一人の生徒に）この横幅と縦の比率は同じだから、しっかり確認しよう」

先生 「（一人の生徒に）ブロックの穴の影と白い床に落ちる影、どっちが暗いかよく見てごらん。全体で光の印象を合わせないと、まだ部分部分で見過ぎかな」

先生 「みんなよく離れてな。自分のデッサンとモチーフの印象があってるかよく確認しような」

離れて見る生徒がちらほらいる。確認してはデッサンに手を加えている。

先生 「よし。じゃあ今日はここまでな」

生徒たちはデッサンの用具をそれぞれ片し始める。まだ少し加筆している生徒もいる

先生 「イーゼルと箱椅子はそのままでもいいからな。明日5時から続きを描いて7時から講評。いいな」

生徒 「はい」

先生 「あ。それと。明日で前期の授業は終わりだ」

先生 「前期最後の講評だから。授業のあとで、みんなでカラオケにでも行こうか」

先生 「ボーリングでもいいぞ」  
先生 「篠田どっちがいい？」  
篠田 「はい」  
先生 「カラオケとボーリング。どっちがいい？」  
先生 「ボーリングの方がいいか」  
篠田 「どっちでも大丈夫です」  
先生 「そうか。浜野はどっちがいい」  
浜野 「どっちでも大丈夫です。」  
先生 「そっか」

先生 「じゃあ。スポッチャにしようか」  
先生 「な。あそこならカラオケもあるし、ボーリングとかいろんなのあるんだよな」  
先生 「先生のおごりだ。田代、卓球部だったんだろ。先生と卓球勝負しような。先生も卓球やってたんだ」  
田代 「はい」

先生 「よし。じゃあみんな明日はちょっと遅くなるってこと親にちゃんと伝えてこいよ」  
生徒 「はい」

先生 「はい。じゃあ。お疲れ様」

生徒 「ありがとうございました」

準備ができたものから、先生の前を通りアトリエを出て行く。

篠田 「ありがとうございました」  
先生 「はいお疲れ様」  
金沢 「さようなら」  
先生 「はいさようなら」  
田代 「ありがとうございました」  
先生 「はい。さようなら」  
浜野 「さようなら」  
瀬戸 「ありがとうございました」  
先生 「お疲れ様」  
宮崎 「ありがとうございました」  
先生 「はいお疲れ様」

生徒たちは全員帰る。

### ●画塾

翌日の画塾の20時ごろ。先生が一人座っている。  
成田典子がアトリエに入ってくる。

典子 「あれ」

先生 「……」

典子 「今日講評じゃなかったの？」

先生 「……ああ」

典子 「……どうしたの？」

先生 「うん。来ないんだよ。誰も」

典子 「そうなの」

先生 「うん」

典子 「（デッサンを見て回って）昨日は全員来てたんでしょ」

先生 「ああ」

先生 「嫌だったのかな」

先生 「……嫌だったら、嫌だとそう言ってくればいいのか」

典子 「何かあったの？」

先生 「別に何があったとかではないけどさ」

先生 「スポッチャにね。行こうって言ったんだ」

典子 「スポッチャ？」

典子 「駅の向こうの？」

先生 「ああ。今年は生徒数も増えたし。生徒同士もまだあまり交流してなさそうだったから。だから」

先生 「学期終わりだったし。親睦会も兼ねて」

先生 「カラオケとかボーリングとかしてさ。違ったのかな」

典子 「そんなことないと思うけど」

先生 「こっちの子たちはそうなの？」

典子 「こっちって。郡山の？」

先生 「大宮ではこんなことなかったからさ」

典子 「どうかしら」

先生 「スポッチャが良くなかったのか」

典子 「どうだろう」

先生 「俺だって、別にカラオケとかボーリングなんて滅多に行きはしないよ。俺だって行きたいわけじゃない」

先生 「俺がただスポッチャに行きたい人みたいに思われていたら」

先生 「それは嫌だよ」

典子はデッサンを見て回っている。

典子 「少し早かったんじゃない。スポッチャは」

先生 「でも。あれくらいの子達は行くんじゃないのか。スポッチャ」

典子 「人によるんじゃない」

先生 「そうか。スポッチャは早すぎたか」

典子 「うん・・・」

先生 「俺は。恥ずかしいよ」

先生 「スポッチャだなんて」

典子 「陽くんは別に間違っていないと思うよ」

先生 「・・・」

典子 「スポーツとか、体を動かすことをきっかけに徐々に距離を縮めようって。そう思ったんでしょ」

典子 「お互いまだ話したことの無い子たちにとって、それはとても有効な手段だと思うわ」

先生 「そうだろう」

典子 「うん。それはいい判断だったと思う」

先生 「でも誰も来なかった」

典子 「少し動揺しただけよ」

典子 「いきなり距離を縮めてこられたような気がして」

典子 「それで動揺したんじゃない」

典子 「いきなりスポッチャと一緒に行くのってなかなかの距離の詰め方だと思うの」

先生 「そうか。そうなのか」

典子 「いい関係って程よい距離が保てている関係なんじゃないかな」

典子 「近ければ近いほどいいってことじゃないと思う。その距離感がお互いで分かり合えていることが重要だと私は思う」

典子 「うん。やっぱりある程度の段階を経てのスポッチャなんじゃないかな」

典子 「別にあなたがスポッチャに行きたがってる人とは思ってないと思うよ」  
典子 「誰も」

先生 「問題は夏期講習の初日だよ」

先生 「どんな感じで接するべきなのか、今はまだわからない」  
典子 「どんな感じって？」  
先生 「今日のことを言うべきかどうか」

典子 「言わなくていいんじゃない」  
典子 「なんのために言うの？」

典子 「誰も来なかったぞって？言うの」  
先生 「なかったことにするのか」

先生 「なかったことにはできないんじゃないか」

先生 「誰かは行っているだろう。そう思ってるってことだろ」  
典子 「そうね。誰かは行ってるだろうって。思ってると思う」

先生 「みんなのそういう想いが重なって、今日のこういう事態になったんじゃないか？そのことをみんなは知るべきなんじゃないか」

先生 「そういう意味で。俺はこれから一人でスポッチャに行こうと思う」

典子 「行くの？」  
先生 「俺だって行きたくはない。一人でスポッチャに。全然行きたくはないよ。でもみんながしたことがどういう事態を招いたかを知ってほしい。そのために行こうと思う」

典子 「そんなことしたら。スポッチャに行きたがってた人のように思われぬかしら」  
先生 「そこは誤解のないよう丁寧に説明するよ」  
典子 「先生は別にスポッチャに行きたかったわけじゃないって？」  
先生 「ああ」  
典子 「誰も来なかったから、一人でスポッチャに行ったんだって」  
先生 「俺のかいたこの恥をもって、彼らにこの出来事を何かしらの教訓にしてほしい」

典子 「・・・（笑う）」  
先生 「何だよ」

典子 「ごめん。思い出しちゃって」  
先生 「何を」

典子 「大学の時行ったよね。ボーリング。ほら。油画のみんなと」  
先生 「・・・」  
典子 「3年生でゼミごとに分かれてすぐの頃」  
先生 「ああ」  
典子 「石田くん覚えてる？」  
先生 「石田・・・」  
典子 「ほら、元空手部だって言う割にすごいガリガリで。坊主頭の」  
先生 「ああ。石田」  
典子 「そう石田くん。ボーリングのとき、玉の重さにすごいフラフラしてたじゃない」  
先生 「そうだったかな」  
典子 「覚えてない？自分の番が来て玉を持ち上げた時、石田くんすごいフラフラしていたの。ボーリングの玉を振りかぶっては玉の重さで右へ左へ。体勢を立て直そうとしては前へ後ろへ振り回されてた」

典子 「あのとき私思ったの。あ、これが小躍りだって。小躍りってこういうことなんだなって」

典子 「別に石田くんは小躍りがしたかったわけじゃない。でも意図してなかったからこそだと思う。あんなに見事な小躍り。見たことなかった。ボーリングの玉と石田くんが踊ってるように見えたの」

先生 「意地の悪い見方だよ」  
典子 「そうかもしれない。でも私本当に感動したの。その小躍りに」

先生 「覚えてないな」  
典子 「結局最後投げたボールが真後ろの、私たちの方に転がってきて。石田くんはレーンの方に転がっていった。みんなはすごい笑ったけど、私はなんだかとても感動したの」

典子 「それと同じね」

先生 「何が同じなんだ」

典子 「わからないけど。なんか思い出しちゃった」

#### ●スポーツ総合施設スポッチャ

男はひとりでボーリングをしている。移動する。バッティングをする。移動する。セグウェイに乗る。見知らぬ人同士が係員にセグウェイに乗るレクチャーを受けている。なかなか直立できない。うまくバランスが取れずに後退しては降りてしまう。やっと立てるようになった後、係員の誘導のもと、外周30メートルほどの楕円のコースをのろのろと周回する。何周かしたら、そこで止められる。セグウェイを降りて解散する。典子はそれを遠巻きで見守っている。

典子 「どうだった。セグウェイ」

先生 「うん。難しいもんだな」  
典子 「でもセグウェイに乗れるって言っても。講習受けて終わりなのね」  
先生 「ああ」  
典子 「もっと自由にやらせてくれたらいいのにね」

先生 「いきなり自由になって言われたって。みんな困るんだよ」

先生 「そういうのが向いてる人もいるけど」

終わり